

週刊金曜日 2009.12.18 (780号) より
許可を得て転載

中塚明・奈良女子大学名誉教授に聞く 朝鮮侵略の事実を書かない「司馬史観」 の危険性

NHKドラマ「坂の上の雲」の原作は、歴史の偽造に満ちている。朝鮮半島支配のための戦争を正当化する司馬遼太郎の発想こそ克服されるべき自国中心主義なのだ。

—『坂の上の雲』のひどさ、危険性が最も象徴的に示されているのは、「日本は維新によって自立の道を選んできました以上、すでにそのときから他国（朝鮮）の迷惑の上においておのれの国の自立をたもたねばならなかった」とする記述ではないでしょうか。実際に「迷惑」をかけられた朝鮮半島の人々の痛み、苦しみ、悲しみに何の配慮もない。

まったくおっしゃる通りです。もっとも司馬に限らず、明治時代から実に今日に至るまで、「朝鮮は日本に支配されて当たり前だ」というような考え方はきわめて根深いのです。逆にそれを真っ向から否定する言説は、非常に乏しい。その意味でこの小説は、「日本人の常識に基づいて書かれた」とも言えなくもありません。

それでもこんな『坂の上の雲』みたいな考え方が今も堂々と広まるなら、韓国の側からすれば「何を言っているんだ」ということになりかねない。実際、外交問題になってもおかしくないでしょう。

一方で、「日清戦争から日露戦争にかけての十年間の日本ほどの奇蹟を演じた民族は、まず類がない」などと自国中心主義で持ち上げる。朝鮮半島の植民地化が目的であったにもかかわらず、日清戦争が「清国や朝鮮を領有しようとしておこしたのではなく、多分に受け身であった」、日露戦争は「追いつめられた者が、生きる力のぎりぎりのものをふりしぼろうとした防衛戦であった」などとウソを書く。しかも小説なのに、「事実」に拘束されることが百パーセントにちかい」と述べる。

司馬という作家は大阪に住んでいて、そこは在日朝鮮・韓国人が多い。地元でそうした人々と接し、さらに在日の歴史家の著書なんかも読んでいたそうですから、『坂の上の雲』を書いた後に少しは「まずかったかな」と内心考えたそうです。そんな小説の、いったい何か「事実」でしょう。

彼は、計算高い人間だったと思いますよ。ありありと見えますよね、売れるためにどうやって書けばいいのか、一般読者の歓心を買うためにどうすればいいのかと考えている司馬の姿が。

—司馬によると、日清戦争の原因は「朝鮮半島という地理的存在にある」そうです。これでは、明治政府が日清戦争から朝鮮支配のため次々に手を打ったという歴史が見えない。

ただ、日清戦争の真実が分かってきたのは、そんなに古い時代ではなかったという歴史的制約性があったのは事実です。私が日清戦争の研究を始めたのは、1960年ぐらいからです。岩波講座の『日本歴史』が敗戦後最初に出版されたときに「日清戦争」を書くことになり、ちょうどいいタイミングで陸奥宗光文書が公開された。国会図書館の憲政資料室でこの文書を読みながら、日清戦争の研究をしていきました。

朝鮮から始まったアジア侵略

外務大臣の陸奥宗光ですね。

そこでは、たとえば日清戦争の後も日本軍が朝鮮に駐兵権を得るため、日本軍を留めるよう朝鮮政府から日本政府に「依頼の文書」を出させようとしたその原案を、当の日本の外務省が作っているなどの記録が明らかになった。朝鮮を従属させるためのさまざまな条約草案らしきものを、陸奥外相のもとで作っていた。それを示す文書が、初めて公開されたのです。

私がそうした研究を始めたころ、1968年から『坂の上の雲』が世に出る。それを読んで、最初から非常に違和感がありましたね。明治政府は司馬も信じていたように表向き「朝鮮の独立のために」と言いながら、裏で実際にやった事実はこうだったのだと、陸奥文書を見て知っていましたから。

—司馬は陸奥文書を読んでいたのですか。

いや、読んでいなかったと思いますね。陸奥文書などをきちっと読んでおけば、「受け身」だの「防衛戦」だのという話ではまったくなかったという事実がわかるはずですから。日清戦争のとき、朝鮮半島の植民地化政策に関し一次資料を元に分析したのは、同じ一九六八年に私が出版した『日清戦争の研究』（青木書店）が初めてだと思います。

司馬は、調べようと思ったら調べられたはずなのに、事実を一切書かなかった。それどころか、「韓国自身の意志と力でみずからの運命をきりひらく能力は皆無とってよかった」などと、侮蔑的な記述をする。

—しかも日本は、日露戦争前に「局外中立」を宣言したその朝鮮を無理矢理軍事占領しました。ところが司馬はこれに触れず、戦争は朝鮮を狙ったロシアからの「防衛」だったと。

まったくの大間違いですね。司馬は「坂の上の雲」で、

何度も日露戦争を「祖国防衛戦」に仕立て上げようとしています。しかしながら、ロシアは満州を確保しようとしたが、朝鮮を植民地化しようとする意思がなかったことは、多くの歴史的資料が証明しているのです。しかも最近の研究から、ロシアは南満州を放棄しても日本との戦争を回避しようとした事実が判明しています。明治政府は、こうしたロシアの意図を察知しながら、むしろ日本側から開戦に走ったといえます。

－ところが司馬の落ち着いた先は、「明治の指導者たちは、一五年戦争を起こした軍閥指導者と違って立派だった。日露戦争が終わってから、日本はおかしくなった」という床屋談議のような俗論です。"史観"などともてはやされていますが。

とんでもない話です。一五年戦争での一般人虐殺や道義心の欠如、国際条約・協定の無視といった悪行は、全部日清・日露戦争でも予行演習のようにやられている。たとえば日清戦争における日本軍の最初の攻撃が、七月二三日の宣戦布告もしていない朝鮮の王宮に対してであった事実を、何人の日本人が知っているでしょう。

清と戦争する口実をでっち上げるため、王宮を占領して国王を捕らえ、「清国軍を朝鮮から追い出してくれ」という「公式文書」を出させようとした。なのに明治政府は、「王宮の朝鮮兵が発砲してきたので応戦防衛のため王宮に入った」などとウソを発表します。

－満州事変よりも悪質です。

陸奥は、参謀本部次長だった川上操六や朝鮮の日本公使の大鳥圭介らと事前に王宮の武力占領計画を立てました。大鳥と陸奥は、朝鮮政府に対し「明治九年に日本政府と条約を結んで朝鮮は独立の国だと書いてあるのに、"属国を保護する"と称して清国軍が来ているが、条約違反だろう」と難題を吹っかけることを考え出したのです。その時、首相の伊藤博文は「それははなはだ妙案だ」といって了解します。

今こそ歴史の直視を

－こんなことをしでかしておいて、よく「奇蹟を演じた民族」などと司馬は賛美できますね。

伊藤は、このようにワンクッション置いて悪事を既成事実化することに長けている。日清戦争の終わった一八九五年一〇月に起きた、「親露派」とされる閔妃暗

殺でもそうでしたね。前代未聞の恥ずべきこの殺害を日本軍人や浪人らと実行した公使の三浦梧楼に朝鮮の日本軍を動かす権限を与えるため、参謀次長の川上がそれを許可する。それを知って外相だった西園寺公望が怒るのですが、伊藤は閣僚をまとめてそれに協力した。

－他国の要人を堂々と殺害しても、三浦は罪に問われませんでした。

殺害という点では、司馬が「新興宗教を信じる農民の反乱」程度としてしか見なさなかった、東学農民の第二次蜂起大量虐殺が特筆すべきひどさです。日清戦争さなかの一八九四年一〇月秋から起こったこの蜂起は、日本軍の王宮占領をはじめとした侵略に反対して立ち上がった、アジアでは初の民衆による抗日闘争でした。

司馬はまったく触れていませんが、計五万人以上が虐殺されている。しかも竹槍程度しかもたない民衆を小銃で皆殺しにした。そのくせ日清戦争の開戦の詔勅では「朝鮮の独立のために」となっているのですから。日露戦争後も植民地化に反対する人々への虐殺は続き、日本軍の記録『朝鮮憲兵隊歴史』などに〇〇村を全部焼いたなどという記述があります。中国における三光作戦がすでに実施されている。

－来年は、日韓併合 100 年になります。もうこの辺で、明治政府が偽造した歴史に乗った司馬の「明治栄光論」から決別しなくては。

本来なら、敗戦時に日清戦争までさかのぼって歴史を見直すべきでした。それをやらなかった結果、「明治は良かった。昭和の軍閥が悪かった」という"常識"が戦後を支配してしまう。現在も、"過去の反省"という場合せいぜい一五年戦争だけでしょ。

そうではなくて、朝鮮半島の植民地化を目的とした二つの戦争から始めなければなりません。おそらくこんなことを言っても、巨大なNHKがこの小説をドラマとして全国に流すのですから勝負にはならないかも知れませんが。しかし、おかしいことは「おかしい」と言い続けねばならない。これは特に日韓、日朝の関係を考えるなら、「知らなかった」ですむ問題ではないのですから。

聞き手／編集部・成沢宗男
週刊金曜日 2009.12.18 (780号)

1 他国を植民地にせねば日本も植民地になった？

「十九世紀からこの時代にかけて、世界の国家や地域は、他国の植民地になるか、それがいやならば産業を興して軍事力をもち、帝国主義国の仲間入りするか、その二通りの道しかなかった。……日本は、その歴史的段階として朝鮮を固執しなければならぬ。もしこれをすてれば、朝鮮どころか日本そのものもロシアに併呑されてしまうおそれがある。この時代の国家自立の本質とは、こういうものであった」(文春文庫新装版第3巻、173頁。以下、同版)

歴史の事実

日本が最初に植民地にしたのは台湾だったが、そうしなければ「他国の植民地」になったのか。

日清・日露戦争の指導者であった山縣有朋は1890年に書いた『外交政略論』という自著で、日本の領土は独自で守ることが可能であり、さらに日本の領土を狙っている国も存在していないという認識を有している。「朝鮮を固執しなければ」「他国の植民地になる」などという見方は司馬の妄想で、当時の指導者すらそんなことは考えていなかった。

それどころかタイやエチオピアのように、侵略政策をとらずとも帝国主義国家から植民地化されなかった国家もある。当時の日本においても、侵略・対外膨張によらない平和国家として発展すべきとする考えもあった。「植民地になるか」あるいは「帝国主義国の仲間入り」するかという単純な選択しかなかったという認識こそ、朝鮮植民地化を正当化する論弁である。

2 日露戦争の原因はすべてロシア側にあった？

「後世という、事が冷却してしまつた時点でみてなお、ロシアの態度に

は、弁護すべきところがまったくない。ロシアは日本を意識的に死へ追いつめていた。日本を窮鼠にした。死力をふるって猫を噛むしか手かなかったであろう」

(第3巻、178頁)

「ロシアが、フランスの利益に関係のない極東での侵略道楽をはじめたがために日露戦争がおこつた」(第5巻、308頁。)

歴史の事実

1903年6月の御前会議では、
①ロシアが満州から撤兵しない機会を利用して、数年来の懸案である「韓国問題」の「解決」をはかる

②この「解決」にあたっては、どんな事情があろうと韓国の一部たりともロシアに「譲歩しない」

-などと決定している。つまり日本側は、「韓国問題」という名の朝鮮半島単独支配のため、最初から戦争をする気だった。だからロシア側が基本的に日本の朝鮮における「権利」「優越権」を認め、朝鮮半島の北緯39度以北の中立地帯化、満州のロシア側の権益是認を求めたにもかかわらず、1904年2月6日に国交断絶を宣言し、8日から9日にかけて韓国と清国で日本艦隊がロシア艦隊を一方向的に奇襲攻撃した。

もともとロシア側は前年、アレクセイ極東総督が軍隊の動員許可を求めたが、ニコライ皇帝は「戦争を望まないし、この戦争を許さない」と、総督から軍隊動員権を剥奪している。この背景には、「(弱く貧しい)朝鮮でのロシアの影響力の強化は、極東でロシアが解決しなければならない課題のうち最重要のものではない」(1897年にロシア外務省がソウルへ赴任する大使に送った訓令)という認識があった。

3 日本は国際法をきちっと遵守した？

「日本はこの戦争を通じ、前代未聞なほどに戦時国際法の忠実な遵奉

者として終始し、戦場として借りている中国側への配慮を十分にし、中国人の土地財産をおかすことなく、さらにはロシアの捕虜に対しては国家をあげて優遇した。……精神的な理由として考えられることは、江戸時代以来の倫理性がなお明治期の日本国家でのこっていたせいであつたらうとおもわれる」(第7巻、218頁)

歴史の事実

日露戦争前に大韓帝国は、何度も「中立保障」を申し入れている。当時、中立国の領土不可侵は国際法に明記されていなくとも、一般的規範として認識されていた。にもかかわらず日本は主権国家の申し入れを無視し、勝手に朝鮮半島に軍隊を送り込んで戦争を始めた。さすがにうしろめたかったのか、明治政府は対外向けに「大韓帝国の同意を得た」などとウソの発表をしている。

しかも日本も調印した1899年のハーグ陸戦条約の「陸戦ノ法規慣例二問スル条約」に反し、「占領地の法律の尊重」をせず勝手に電信線や鉄道など軍用施設の保護を命じた「軍律」を大韓帝国に押し付け、「違反者」である多くの民衆を処刑している。無論交戦国ではないのに軍事占領したこと自体も、国際法違反だった。

しかも日露戦争中、日本軍は戦場となった満州において、現地住民に対し殺害や強奪、労働の強制、住居の破壊・没収などを繰り返した事実については、さまざまな証言記録が残っている。戦地におけるロシア兵捕虜の虐待や虐殺、所持品の強奪も同様であった。いったい、どこが「倫理性」なのか。

※高井弘之「検証『坂の上の雲』」(えひめ教科書裁判を支える会発行。問い合わせ Tel/Fax0898-23-5808)等を参照。

(まとめ/編集部)